

### 3歳未満の子どもを育てる専業主婦の罪障感が対児感情に及ぼす影響

江村綾野\*

## Mother's guilt and its effect on feelings toward children under three years

EMURA Ayano

### Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of guilt experienced by mothers on feelings toward children under three years of age, as well as the effects of depression on mothers' feelings of guilt. Mothers (N = 345) completed a questionnaire. Results indicated that "negative feelings toward the child" and "feelings of priority over the child" were related to mothers' sense of guilt. Moreover, depression influenced feelings of guilt in mothers with children under one-year, and it had an effect on feelings towards the child. Furthermore, depressive symptoms in mothers with children between one and three years influenced feelings of guilt, which in turn negatively influenced feelings toward the child, whereas feelings of priority over the child positively influenced feelings toward the child. It was concluded that characteristics of guilty feeling in mothers and the age of her children has an interactive effect on mothering.

Key words: mother's guilt, depressive symptoms, feelings toward a child, mothers with children under three years of age, mothering

### 問題と目的

#### 母親の否定的感情が子育てに及ぼす影響

母親の多くは、子育てにおいて肯定的な感情と否定的な感情の両面を経験する。母親が子どもや子育てに対して抱く否定的感情は、母親の精神的健康に負の影響を及ぼす(安藤・荒牧・岩藤・丹羽・砂上・掘越, 2008)。その一方で、母親が不快感情を契機に子どもの育ちや自らのかかわり方を振り返り育児を方向づけることは、親としての発達につながる事が指摘されている(菅野, 2001)。子育てにおける母親の否定的感情は、母親としての適応に関連する重要な感情と考えられる。

#### 子育てにおいて母親が抱く罪障感の特徴

母親が子育てにおいて抱く感情として子どもに対する申し訳なさがあり、この感情は母親罪障感<sup>1</sup>と定義される(石野, 2007)。罪障感とは、他者に対する自己の行為を失敗と捉えたときに喚起される感情であり(Lewis, 2008)、他者の苦痛の原因が自分にあると認知することと関連している(Hoffman, 2001)。

たとえば、仕事と家庭が同時に多忙であるとき(Shaw, 1993; 濱田, 2005)、保育所に子どもを預けるとき(Giampino, 2002)、子どもが社会的規範に反したとき(Scarnier, Schmader & Lickel, 2009)などの場面で母

---

キーワード：母親罪障感、抑うつ、対児感情、3歳未満児の母親、子育て

\*平成22年度生 人間発達科学専攻

親が抱く罪障感は、子育ての悩みや否定的感情に影響を及ぼすことが示されている。子育てにおいて母親が経験する罪障感は母親にとって負の感情である一方で、母親が罪障感を抱くことは子どもとより良い関係を結ぶためにはどうすればよいかと考え、行動に移す動機であることが指摘されている（石野, 2007）。母親の罪障感は否定的な側面ばかりではなく、肯定的な側面ももつ感情であることが考えられる。

母親罪障感は、喚起される育児場面に関連したいくつかの罪障感で構成されている。稲葉（2003）では、母親罪障感が「共感・想像が困難な状況に対する罪障感」、「一般的道徳的規範の違反に対する罪障感」、「関係の罪障感」、「無力な傍観者の罪障感」、「責任の所在が明確でない状況に対する罪障感」によって構成されることが示されている<sup>2</sup>。また、石野（2007）は、母親罪障感が子どもに対して否定的な評価をした「子の性格・状況否定場面」、母親自身の都合で母親役割を遂行しない「脱母親役割場面」、子どもの世話を満足に行うことができない「母親役割不足場面」の3つの因子で構成されることを指摘している<sup>3</sup>。母親罪障感は日常的な育児場面において喚起される感情であり、子どもあるいは自分自身を否定的に捉えることが罪障感の喚起に関連すると考えられる。

### 母親の感情と心理的要因の関連

妊娠期から産後1年の母親を対象にした縦断研究では、調査が行われた5時点のすべてに回答があった初産婦のうち21.7%が産後1年までの間に抑うつを経験し、妊娠期と産後6ヶ月の抑うつは、それぞれ産後5週と産後1年の対児感情を否定的にすることが指摘されている（安藤, 2009）。また、抑うつは乳児の母親だけでなく、幼稚園児の母親の子育てに関する否定的感情とも関連する（安藤ら, 2008）。抑うつは、子育てに関連する母親の否定的感情や子どもに対する感情に負の影響を及ぼすことから、乳幼児の母親において重要な心理的要因であることが考えられる。

また母親の否定的感情と対児感情の関連については、母親の育児ストレスは対児感情を否定的にすること（高橋, 2007）や、18ヶ月の子どもの母親の怒りは対児感情とは直接的な相関はなかったこと（武田, 2009）が指摘されている。このように、先行研究では母親の否定的感情から対児感情への影響についての結果は一致しておらず、さらなる検討が必要である。

### 先行研究の課題と本研究の目的

子育てにおいて母親が経験する罪障感に関する先行研究は、おもに3歳以上の子どもの母親を対象にして行われた（稲葉, 2003；石野, 2007）。わが国の子育てに関する社会的環境の特徴として、3歳未満児の母親の約80%が専業主婦であり（全国保育団体連絡会・保育研究所, 2009）、乳幼児を育てる専業主婦の罪障感についてさらに詳しく検討することが課題であると指摘されている（石野, 2005）。また、0歳児の母親にはマタニティブルーズとよばれる産後の一過性の抑うつ気分や情緒不安定が出現しがちであり（大日向, 1988）、約2割の母親が産後1年までに抑うつを経験する（安藤, 2009）ことが示されている。さらに、子どもの発達の変化に伴って、母親の育児行動は変化する（高濱・野澤, 2011）。たとえば、乳児期の育児は、抱っこ、授乳、おむつ替え、子どもをあやすことなど子どもの世話が中心であるが、歩行開始期頃から活発化する子どもの行動によって母親の育児行動が多様になり、母親の育児感情に変化が促されることが考えられる。そこで本研究では、3歳未満児を育てる専業主婦を対象として、0歳児の母親と1・2歳児の母親に分けて分析することとする。

石野（2007）では、母親罪障感は母親としての適応に影響を及ぼすことが示されている。しかし、母親罪障感が心理的要因に及ぼす影響について十分に検討されたとは言い難い。母親罪障感の適応的機能を明らかにするためには、母親罪障感から子どもに対する感情への影響を正と負の両面から同時に検討することが必要である。対児感情（花沢, 1992）は、対児肯定感と対児否定感の2因子より構成されており、子どもに対する感情を肯定的側面と否定的側面の両面から検討することが可能である。そこで本研究では、3歳未満児を育てる専業主婦の母親罪障感から対児感情への影響について、子どもの年齢別に検討する。

また、抑うつは子育てに関連する感情を否定的にする一方で、友人や知人による子育ての援助（田中, 1997；武田・宮地・山口・野崎, 1998）、入浴や授乳など夫による直接的育児援助（小林, 2009）、妻に対する夫の精神的な援助（小田切・菅原・北村・菅原・小泉・八木下, 2003）によって低くなることが示されている。このことから、抑うつは母親罪障感を高くすると同時に、ソーシャルサポート、父親の育児関与、夫婦関係満足度によつ

て低くなるものが推測される。さらに、伝統的母親役割観は有職の母親よりも無職の母親が高く（柏木・蓮香，2000）、伝統的母親役割観から母親罪障感への関連は、無職の母親の中でも伝統主義的な性役割観をもっている母親が高い（石野，2007）ことが指摘されている。しかしこれらの研究は、3歳未満児を育てる専業主婦のみを対象としたものではない。また、抑うつから母親罪障感への影響を検討した研究は見当たらない。そこで本研究では、母親罪障感から対児感情への影響と同時に、抑うつと伝統的母親役割観から母親罪障感への影響と、ソーシャルサポート、父親の育児関与および夫婦関係満足度から抑うつへの影響について検討する。

以上より本研究の目的は、3歳未満の子どもを育てる専業主婦を対象として、母親罪障感から対児感情への影響について検討することである。その際、抑うつと伝統的母親役割観から母親罪障感への影響と、ソーシャルサポート、父親の育児関与および夫婦関係満足度から抑うつへの影響も含めて子どもの年齢別に検討する。仮説は以下の通りであり、Figure 1 に示す。

仮説1 抑うつは父親の育児関与、ソーシャルサポートおよび夫婦関係満足度によって低くなるだろう。

仮説2 抑うつは母親罪障感を高くするだろう。その影響は1・2歳児の母親よりも0歳児の母親が高いだろう。

仮説3 母親罪障感是对児感情を否定的にすると同時に、対児感情を肯定的にするだろう。

仮説4 伝統的母親役割観は母親罪障感を高くするだろう。

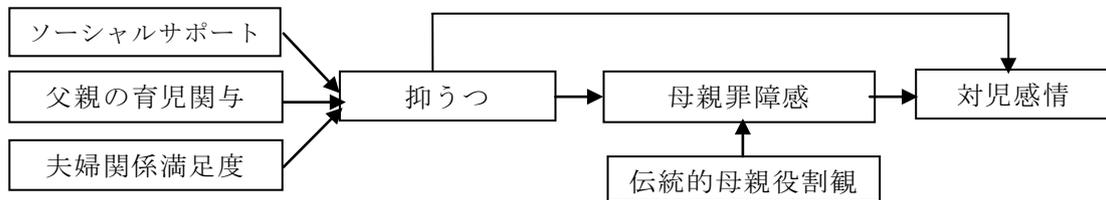


Figure 1 本研究の仮説モデル

## 方 法

### 調査対象者

調査対象者は、3歳未満児を育てる専業主婦345名（平均年齢33.2歳、 $SD=3.84$ ）であった。子どもの年齢別では、0歳の母親が141名（40.9%）、1歳の母親が134名（38.8%）、2歳の母親が70名（20.3%）だった。なお、対象者には産後休業中もしくは育児休業中の母親が含まれていた。調査期間は2009年9月から11月と、2010年5月であった。

### 調査手続き

1回目の調査は、都内児童館と子育て支援施設7ヶ所においてそれぞれの施設責任者の同意を得て実施した。調査者による個別説明の後、調査に同意した対象者はその場で回答した。回収された調査票は273部であった。児童館や子育て支援施設の利用者は子育てに積極的であるか、または不安や悩みをもつ母親であることが考えられたことから、より一般的なサンプルを得るため、区役所担当課と担当医師会の許可を得て2回目の調査を都内のポリオ予防接種会場にて実施した。調査協力の同意を得た110名に調査票と返送用封筒を手渡し、72部（回収率65.5%）を回収した。

### 調査内容

調査票は以下の8つの尺度で構成された。フェイスシート：対象者の属性について調べるため、年齢、子どもの年齢、最終卒業校、夫の職業についてたずねた。ソーシャルサポート：田中（1997）によるソーシャルサポート尺度6項目を用い、「たくさんいる（4点）」から「全くいない（1点）」の4件法で回答を求めた。父親の育児関与：田中（1997）の項目を参考にして、3歳未満の子どもの父親の日常的な育児内容を含む6項目（子どもと一緒に入浴する、子どもと一緒にあそぶ、子どもを寝かしつける、子どもの着替えを手伝う、子どものオムツ

替えをする、子どもと食事する)を作成した。各項目について「いつもしている(4点)」から「全くしない(1点)」の4件法で回答を求めた。夫婦関係満足度:菅原・詫摩(1997)によるMarital Love尺度19項目の全てを用いると回答者の負担が大きいのと考えた。そこで、因子負荷量が高い項目から順に6項目を選び、「大変そう思う(4点)」から「全くそう思わない(1点)」の4件法で回答を求めた。抑うつ:加藤(2006)が、エジンバラ産後うつ尺度日本版(岡野・村田・増地・玉木・野村・宮岡・北村,1996)を参考にして作成した7項目を用いた。7項目中、6つの項目には「よくあった(4点)」から「全くなかった(1点)」、残る1つの項目には「うまくできた(4点)」から「全くできなかった(1点)」の4件法で回答を求めた。母親罪障感:石野(2007)の母親罪障感尺度を参考にして、3歳未満児の母親が罪障感を抱く育児場面として27項目を作成した。質問項目に示された場面を想起したときに、「申し訳ない」あるいは「ごめんなさい」と思うことがあるかどうかを「よくある(4点)」から「全くない(1点)」の4件法で回答を求めた。伝統的母親役割観:柏木・蓮香(2000)による伝統的母親役割観5項目を用い、各項目について「とてもそう思う(4点)」から「全く思わない(1点)」の4件法で回答を求めた。対児感情:花沢(1992)を参考にして作成された安藤・無藤(2008)の肯定的感情3項目(かわいい、いとおい、あどけない)と否定的感情2項目(じゃまな、わずらわしい)に、肯定的感情として1項目(たのしい)、否定的感情として1項目(くるしい)を追加して作成した。各項目について「非常にあてはまる(4点)」から「全くあてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。以上について、PASW21.0およびAmos21.0を用いて分析した。

## 結 果

### 尺度の検討

**母親罪障感** 石野(2007)では3因子構造が示されているが、本研究の尺度は3歳未満児の生活場面に合わせて改変したことから、確認のために因子分析を行うこととした。まず、母親罪障感27項目の項目分析を行い、フロア効果の見られた2項目を除いた25項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった4項目と2つの因子に高い負荷量を示した1項目を分析から除外し、残りの20項目に対して再度同様に因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターン行列をTable 1に示した。回転前の2因子で20項目の全分散を説明する割合は56.41%であった。

第1因子は、子どもをきつい口調で怒ったとき、子どもを感情的に怒ったときなどの13項目に高い負荷量を示していた。これらの項目は、子どもへの否定的感情や行動の場面に関する項目であると解釈された。そこで第1因子を「子ども否定場面罪障感」と命名した。第2因子は、子どもをおいて友人と時間を過ごすとき、子どもをおいて夫と二人で過ごすときなどの7項目に高い負荷量を示していた。これらの項目は、母親が自分自身の時間や都合を優先する場面に関する項目であると解釈された。そこで第2因子を「自分優先場面罪障感」と命名した。2つの因子は有意な正の相関を示した( $r = .66, p < .001$ )。母親罪障感の因子分析において、「子ども否定場面罪障感」の因子に高い負荷量を示した項目群の平均値を子ども否定場面罪障感得点、「自分優先場面罪障感」の因子に高い負荷量を示した項目群の平均値を自分優先場面罪障感得点として用いた。

**伝統的母親役割観、ソーシャルサポート、父親の育児関与、夫婦関係満足度** これらの尺度については、先行研究に従い全ての項目の平均値を求め、尺度得点とした。

**抑うつ** 本研究では、7項目の平均値を抑うつ得点として用いた。

**対児感情** 本研究では、安藤・無藤(2008)の対児感情尺度に2項目を追加して尺度を作成したことから、確認のために因子分析を行った。まず対児感情尺度7項目の全ての項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると2因子構造が妥当であると考えられたため、再度2因子を仮定して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果「あどけない」に十分な因子負荷量が示されなかったため分析から除外し残りの6項目に対して再度同様に因子分析を行った。回転前の2因子で6項目の全分散を説明する割合は65.50%であった。第1因子は、わずらわしい、じゃまな、くるしいの3項目に負荷

Table 1 母親罪障感尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

項目内容	因子 1	因子 2	共通性
<b>第 1 因子 子ども否定場面罪障感 (<math>\alpha = .94</math>)</b>			
子どもをきつい口調で怒ったとき	.92	-.12	.72
子どもを感情的に怒ったとき	.92	-.14	.69
イライラして子どもに八つ当たりをしてしまうとき	.89	-.19	.60
子どもに細かいことを言い過ぎたとき	.85	-.07	.65
子どもの性格について否定的なことを言うとき	.77	.04	.63
子どもにあれもダメこれもダメと言ったとき	.68	.05	.51
子どもがやる気になっている時に否定的なことを言ったとき	.67	-.05	.40
子どもの相談にのっていないと感じたとき	.62	.13	.50
子どもの訳を聞かず決めつけたとき	.62	.20	.58
子どもの話にゆっくりと耳を傾けられないとき	.61	.12	.48
子どもをなかなか素直に誉められないとき	.58	.29	.65
子どもに親しみや愛情を感じられないとき	.47	.27	.46
子どもをほかの子と体力、能力を比較するとき	.44	.31	.47
<b>第 2 因子 自分優先場面罪障感 (<math>\alpha = .83</math>)</b>			
子どもをおいて友人と時間を過ごすとき	-.14	.76	.46
子どもをおいて、夫と二人で過ごすとき	-.07	.75	.49
長い時間子どもを預けているとき	-.01	.72	.52
自分のために時間を使うとき	-.12	.62	.30
子どもをひとりぼっちにさせているとき	.22	.49	.43
子どもの見送りや出迎えができないとき	.32	.43	.46
別れ際に子どもが泣いたりぐずっているとき	.20	.41	.31
因子間相関	因子 1	因子 2	
	因子 1	.66	
	因子 2	.66	

量が高いことから「対児否定感」、第2因子は、いとおいしい、かわいい、たのしいの3項目に負荷量が高いことから「対児肯定感」と命名した。Cronbachの $\alpha$ 係数は「対児否定感」が.79、「対児肯定感」が.56であった。2つの因子は有意な正の相関を示した ( $r = .39, p < .001$ )。項目の平均値を対児否定感得点、対児肯定感得点とした。

子どもの年齢別基礎統計量、各変数の得点比較、相関分析

まず各変数の平均値と標準偏差を算出し、子どもの年齢別に各変数の得点を比較した。その結果、夫婦関係満足度と対児肯定感は、0歳児の母親の得点が1・2歳児の母親よりも有意に高く、子ども否定場面罪障感、自分優先場面罪障感、対児否定感は、1・2歳児の母親の得点が0歳児の母親よりも有意に高かった。

Table 2 子どもの年齢別各変数の基礎統計量、平均の差の検定、相関分析の結果

										0歳児の母親 n=141		1・2歳児の母親 n=204		t 値
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均値	SD	平均値	SD	
1 ソーシャルサポート	—	.11	.20*	-.31***	-.17*	-.12	.28**	.10	-.25**	2.81	.54	2.80	.50	.10
2 父親の育児関与	.10	—	.32***	-.05	.09	.10	.02	-.10	-.01	3.00	.63	2.87	.61	1.92
3 夫婦関係満足度	.07	.24**	—	-.24**	-.10	-.01	.02	.19*	-.24**	3.32	.56	3.12	.48	3.40**
4 抑うつ	-.20**	-.12	-.19**	—	.32***	.24**	-.10	-.15	.30***	1.82	.45	1.85	.49	.68
5 子ども否定場面罪障感	.04	-.08	-.09	.16*	—	.75***	-.11	-.08	.22**	1.86	.79	2.38	.63	6.49***
6 自分優先場面罪障感	.07	-.01	.01	.02	.56***	—	-.03	-.13	.11	1.90	.69	2.06	.54	2.31*
7 伝統的母親役割観	.17*	-.08	.05	-.14*	-.02	.08	—	.09	-.23**	2.52	.51	2.56	.57	.74
8 対児肯定感	.23**	.05	.11	-.34***	-.18**	.01	.27***	—	-.12	3.78	.29	3.71	.34	2.22*
9 対児否定感	-.19**	-.05	-.17*	.38***	.32***	.03	-.23**	-.38***	—	1.45	.55	1.62	.62	2.56*

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

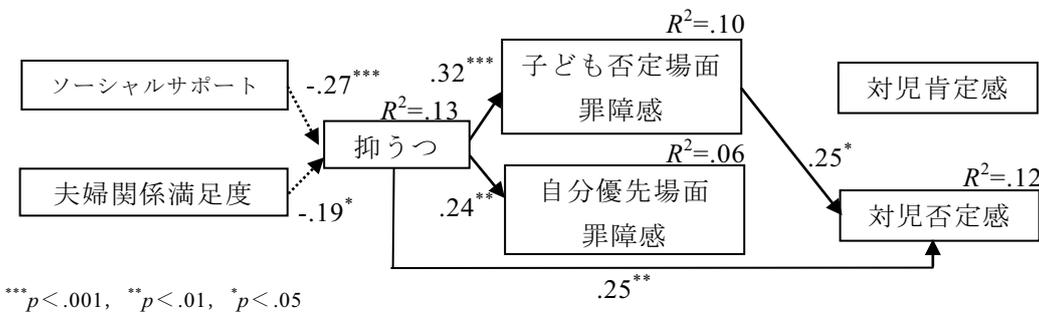
相関分析は、右上が0歳児の母親、左下が1・2歳児の母親

つぎに、子どもの年齢別に各変数間の相関分析を行った。その結果、0歳児の母親群では、ソーシャルサポートと夫婦関係満足度は抑うつと中程度の負の相関、子ども否定場面罪障感と自分優先場面罪障感とは抑うつと中程度の負の相関、子ども否定場面罪障感と対児否定感とは弱い正の相関があった。また、1・2歳児の母親群では、ソーシャルサポートと夫婦関係満足度は抑うつと弱い負の相関、子ども否定場面罪障感とは抑うつと弱い正の相関、子ども否定場面罪障感とは対児肯定感と弱い負の相関、子ども否定場面罪障感とは対児否定感と中程度の正の相関があった。以上の結果をTable 2に示した。

**抑うつ、母親罪障感、対児感情の関連**

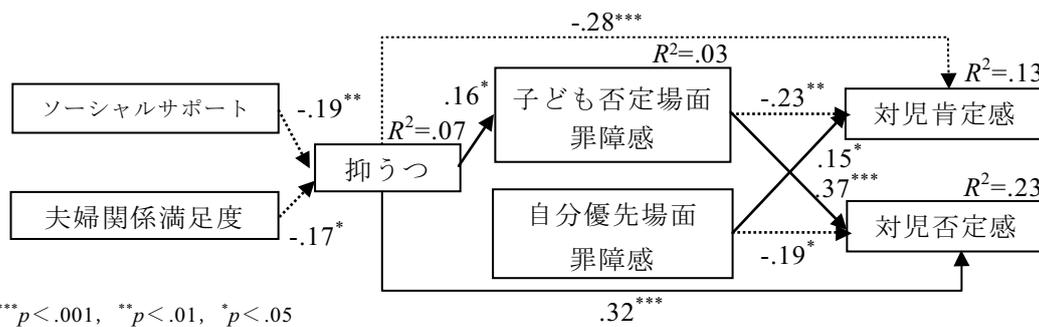
抑うつ、母親罪障感、対児感情の関連を子どもの年齢別に検討するために、仮説に従って多母集団同時分析によるパス解析を行った。有意でなかったパスを除いて再度分析した結果、適合度指標は $\chi^2(16) = 28.36$  ( $p < .05$ )、GFI = .98、CFI = .97、RMSEA = .05となり、おおむね良好な値が得られた。なお、子どもの年齢で係数の大きさに違いのみられた2つのパス（抑うつから子ども否定場面罪障感、抑うつから自分優先場面罪障感）に等値制約をおいた多母集団同時分析も実施したところ、適合度指標は $\chi^2(18) = 34.60$  ( $p < .05$ )、GFI = .97、CFI = .96、RMSEA = .05となった。等値制約をおかない分析は、等値制約をおいた分析よりも適合度が高かったことから、本研究では前者のモデルを採用した。分析の結果を、Figure 2（0歳児の母親モデル）とFigure 3（1・2歳児の母親モデル）に示した。なお、両モデルとも父親の育児関与から抑うつへのパスと伝統的母親役割観から母親罪障感へのパスは有意でなかったため、父親の育児関与と伝統的母親役割観は図から省いた。

まず、抑うつへのパスについては、両モデルともに、ソーシャルサポートと夫婦関係満足度から抑うつへ負のパスが有意であった。したがって、友人や知人による子育ての援助と夫による精神的援助があるほど母親は抑うつではなかった。つぎに0歳児の母親モデルについては、抑うつから子ども否定場面罪障感を介して対児否定感への正のパスが有意であった。また抑うつから自分優先場面罪障感への正のパスが有意であった。したがって、0歳児の母親の抑うつは、子ども否定的場面罪障感を介して対児感情を否定的にする一方で、自分優先場面罪障感を高くした。1・2歳児の母親モデルでは、抑うつから子ども否定場面罪障感を介して対児肯定感への負のパス



\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$   
注：誤差変数を除き、変数間が有意であったパスのみ表記した。実線は正のパス、点線は負のパスを示す。

**Figure 2 抑うつ、母親罪障感、対児感情の関連：0歳児の母親モデル**



\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$   
注：誤差変数を除き、変数間が有意であったパスのみ表記した。実線は正のパス、点線は負のパスを示す。

**Figure 3 抑うつ、母親罪障感、対児感情の関連：1・2歳児の母親モデル**

すと、子ども否定場面罪障感を介して対児否定感への正のパスが有意であった。また、自分優先場面罪障感から対児肯定感への正のパスと、対児否定感への負のパスが有意であった。したがって、1・2歳児の母親の抑うつは、子ども否定場面罪障感を介して対児感情を否定的にする一方で、自分優先場面罪障感是对児感情を肯定的にした。両モデルともに、抑うつは対児感情を否定的にした。

## 考 察

本研究の目的は、3歳未満の子どもを育てる専業主婦を対象にして、母親罪障感が対児感情へどのように影響するのか検討することであった。同時に対象を0歳児の母親と1・2歳児の母親の2群に分けて、抑うつと伝統的母親役割観から母親罪障感への影響と、ソーシャルサポート、父親の育児関与および夫婦関係満足度から抑うつへの影響を検討した。

母親罪障感尺度の因子分析の結果、3歳未満児の母親の罪障感子ども否定場面罪障感と自分優先場面罪障感の2つの因子で構成されることが示された。仮説に沿って多母集団同時分析を行った結果、両群ともに父親の育児関与は抑うつに影響しなかったが、ソーシャルサポートと夫婦関係満足度が抑うつを低くしたことから仮説1は一部支持された。1・2歳児の母親群の抑うつから自分優先場面罪障感へのパスは有意でなかったが、抑うつから子ども否定場面罪障感へのパスは有意であるとともに、パス係数は両群の間に有意差があったことから仮説2は一部支持された。両群とも子ども否定場面罪障感是对児感情を否定的にしたが、1・2歳児の母親群のみ自分優先場面罪障感是对児感情を肯定的にした。このことから、仮説3は0歳児の母親群には支持されず、1・2歳児の母親群には支持された。両群とも伝統的母親役割観から母親罪障感への影響はなく、仮説4は支持されなかった。

### 3歳未満児の母親と3歳以上児の母親の罪障感の特徴

おもに3歳以上児の母親の罪障感、子どもの性格・状況否定場面、脱母親役割場面、母親役割不足場面から構成されることが指摘されている(石野, 2007)。しかし、3歳未満児の母親の罪障感3歳以上児の母親とは異なり、子ども否定場面罪障感と自分優先場面罪障感により構成されていた。3歳未満児の母親の子ども否定場面罪障感子どもに対する怒り場面、3歳以上児の母親の子どもの性格・状況否定場面罪障感親子の葛藤場面と思われる。3歳未満児の母親の自分優先場面罪障感の項目には、3歳以上児の母親の脱母親役割場面と母親役割不足場面の項目がまとめられていた。つまり3歳未満児の母親の罪障感と3歳以上児の母親の罪障感、構造上の違いがあると考えられる。

Lewis (2008)によれば、罪障感自己の行為を失敗と捉えたときに喚起される感情である。子どもの発達的变化に伴い、育児場面は多様化すると思われる。母親が子どもに対する自分の行為を失敗と捉える場面の増加は、罪障感の喚起に関連することが推測される。

### 子どもの発達的变化に伴う抑うつ、母親罪障感、対児感情の関連の違い

3歳未満の子どもを育てる専業主婦は、夫が出勤し帰宅するまでの1日のほとんどの時間を子どもと1対1で過ごしていることが推測される。夫以外の友人や知人などから母親への育児援助が少なく、夫からの精神的援助が母親にとって満足のいくものでない場合には、母親の抑うつが高くなる傾向があり、罪障感も喚起されやすいようである。

0歳児の母親については、抑うつが対児感情を否定的にする(安藤, 2009)だけでなく、子ども否定場面罪障感を介して対児感情を否定的にする可能性があることが示された。自分優先場面罪障感から対児感情への影響が示されなかった理由としては、0歳児の育児は子どもの世話が中心であり、子どもを第三者に託す場面が少なく、自分優先場面罪障感の程度が低いことが考えられる。

1・2歳児の母親については、子どもに対する否定的育児場面での罪障感と母親の自己都合に関する場面での罪障感のいずれかによって、対児感情への影響に違いがあった。歩行開始期の子どもは探索活動が活発化することに伴い、たとえば母親が子どもの行動を制止する場面や子どもを叱る場面など、子どもに対する否定的養育行

動の場面が増加し、罪障感の喚起が促されたと推測される。また、1・2歳児の母親の自分優先場面罪障感が対児感情を肯定的にしたことは、子育てにおける社会的環境との関連が考えられる。近年、一時保育施設の増加により、専業主婦が一時的に子どもを預けることのできる環境が整備されつつある。子どもを預けることが社会的に容認されつつある現代の社会状況において、専業主婦は子どもを預ける場面の罪障感を抱きにくくなっていると思われる。

本研究では、伝統的母親役割観から母親罪障感への影響が認められなかった。その理由として、本研究のサンプルは、最終卒業校<sup>4</sup>が4年制大学以上の母親が多かったことが考えられる。伝統的母親役割観と母親罪障感の関連については、母親の職業の有無と学歴を統制して検討することが必要である。

### まとめと今後の課題

本研究では、3歳未満の子どもを育てる専業主婦の罪障感の構造を明らかにした上で、0歳児の母親と1・2歳児の母親では、抑うつから罪障感を介した対児感情への影響に違いがあることを示した。乳幼児の母親に対して「罪障感を感じることは素晴らしい」（稲葉, 2009）と言いきることはできないだろう。本研究では、専業主婦の罪障感が子どもに対する感情に及ぼす影響を子どもの年齢別に明らかにしたことで、子どもの発達的变化に伴う罪障感の適応的意義が明らかにされたと考える。本研究の対象者の多くは、児童館と子育て支援施設を利用する母親であった。母親は罪障感の悩みを児童館などの支援者に相談することもあるだろう。支援者には罪障感の喚起場面や子どもの年齢に留意した援助が必要と思われる。

最後に、本研究の課題について3点述べる。1点目は、1・2歳児の母親は0歳児の母親よりも罪障感を経験する場面が増加するだけでなく、罪障感自体が高い可能性がある。たとえば、1歳児の母親に対して「0歳の時点でどうだったか」をたずねるなど、罪障感の変化についてより詳細に検討する必要がある。2点目は、母親罪障感と子ども要因との関連についてである。乳児の気質的に難しい行動特徴は専業主婦の母親の否定的感情に影響する（水野, 1995）ことから、母親罪障感には母親要因ばかりでなく子ども要因との関連が考えられる。子ども要因と母親罪障感との関連について検討することが必要だろう。3点目は有職の母親の罪障感との比較によって、3歳未満児を育てる専業主婦の罪障感の特徴がより明確にされるだろう。

### 註

- 1 先行研究では、罪障感もしくは罪悪感と表記されている。本研究では石野（2007）の母親罪障感尺度を用いたことから、罪障感という表記で統一した。
- 2 稲葉（2003）では5つの罪障感が提示されている。「共感・想像が困難な状況に対する罪障感」の最も因子負荷量の高い項目（以下同様）は「貧しい国の人が安い賃金で一生懸命働いているのに、自分は恵まれた環境にいることを実感したとき」、「一般的な道徳的規範の違反に対する罪障感」は「人から頼まれたことをしなかったとき」、「関係の罪障感」は「自分の気分で子どもにあたってしまったとき」、「無力な傍観者の罪障感」は「子育てについてアドバイスしたお母さんが、悩んでしまったとき」、「責任の所在が明確でない状況に対する罪障感」は「子どもを自分の親にあずけているとき」であった。
- 3 石野（2007）による母親罪障感の下位尺度において、最も因子負荷量の高い項目は以下の通りである。「子の性格・状況否定場面」は「やる気になっているときに否定的なことを言ったとき」「性格について否定的なことを言うとき」など、「脱母親役割場面」は「自分のために時間を使うとき」「子どもをおいて友人と時間を過ごすとき」など、「母親役割不足場面」は「長い時間子どもを預けているとき」「子どもの見送りや出迎えができないとき」などであった。
- 4 母親の最終卒業校は、4年制大学以上（54.8%）が最も多く、ついで専門学校・短期大学（35.1%）、高等学校（9.6%）、中学校（0.6%）であった。

### 引用文献

- 安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・掘越紀香（2008）. 幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ：子育て支援利用との関係 保育学研究, 46(2), 235-244.
- 安藤智子・無藤隆（2008）. 妊娠期から産後1年までの抑うつとその変化：縦断研究による関連要因の検討 発達心理学研究, 19(3), 283-293.

- 安藤智子 (2009). 妊娠から産後1年における母親の抑うつに関する縦断的研究 東京：金子書房.
- Giampino, S (2002). 仕事を持つのは悪い母親？ 鳥取絹子 (訳) 東京：紀伊國屋書店. (Giampino, S. (2000). *Les meres qui travaillent sont-elles coupables?* Paris, France : Albin Michel.)
- 花沢成一 (1992). 母性心理学 東京：医学書院.
- 濱田維子 (2005). 仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響. 日本赤十字九州国際看護大学intramural research report3, 147-158.
- Hoffman, M. L. (2001). 共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで 菊池章夫・二宮克美 (訳) 東京：川島書店. (Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development : Implication for caring and justice.* Cambridge University Press.)
- 稲葉小由紀 (2003). 子育て中の母親が感じる罪悪感について 愛知学院大学情報社会政策研究, 6(1), 27-38.
- 稲葉小由紀 (2009). 罪悪感 有光興記・菊池章夫 (編著) 自己意識的感情の心理学 京都：北大路書房.
- 石野陽子 (2005). 就学前児の母親がもつ罪障感の構造：就労状況との関連 家族心理学研究, 19(2), 128-140.
- 石野陽子 (2007). 母親が子どもに抱く罪障感の心理学的研究 東京：風間書房.
- 柏木恵子・蓮香園 (2000). 母子分離 (保育園に子どもを預ける) についての母親の感情・認知：分離経験および職業の有無との関連で 家族心理学研究, 14, 61-73.
- 加藤邦子 (2006). 母親の抑うつと親子関係・養育態度との関連 日立家庭教育研究所紀要, 28, 127-137.
- 小林佐知子 (2009). 乳児をもつ母親の抑うつと夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連. 発達心理学研究, 20, 189-197.
- Lewis, M (2008). Self-conscious emotions: Embarrassment, pride, shame, and guilt. In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones & L. F. Barrett (Eds), *Handbook of Emotions*. New York: Guilford Press, p.742.
- 水野里恵 (1995). 母親の分離不安：母親役割観・乳児の行動的抑制傾向との関連 乳幼児医学・心理学研究, 4, 17-26.
- 小田切紀子・菅原ますみ・北村俊則・菅原健介・小泉智恵・八木下暁子 (2003). 夫婦間の愛情関係と夫・妻の抑うつとの関連：縦断研究の結果から 性格心理学研究, 11, 61-69.
- 岡野禎治・村田真理子・増地聡子・玉木領司・野村純一・宮岡等・北村俊則 (1996). 日本版エジンバラ産後うつ病自己評価表 (EPDS) の信頼性と妥当性 精神科診断学, 7, 525-533.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究. 東京：川島書店.
- Scarnier, M., Schmader, T. & Lickel, B. (2009). Parental shame & guilt: Distinguishing emotional responses to a child's wrongdoings. *Personal Relationships*, 16, 205-220.
- Shaw, E. (1993). Guilt and the working parent. *Australian Journal of Marriage & Family*, 14, 30-43.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価：日記入式夫婦関係尺度について 精神科診断学, 8, 155-166.
- 菅野幸恵 (2001). 母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ 発達心理学研究, 12(1), 12-23.
- 高濱裕子・野澤祥子 (2011). 歩行開始期における親の変化と子どもの変化：量的アプローチ 氏家達夫・高濱裕子 (編著) 親子関係の生涯発達心理学 東京：風間書房.
- 高橋有里 (2007). 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因 岩手県立大学看護学部紀要, 9, 31-41.
- 武田文・宮地文子・山口鶴子・野崎貞彦 (1998). 産後の抑うつとソーシャルサポート 日本公衆衛生雑誌, 45(6), 564-571.
- 武田江里子 (2009). 18か月児を持つ母親の「怒り-敵意」に関する要因および対児感情への影響：妊娠末期から産後18か月までの日本版 POMSによる追跡調査から 日本助産学会誌, 23(2), 196-207.
- 田中昭夫 (1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究 乳幼児教育学研究, 6, 57-64.
- 全国保育団体連絡会・保育研究所 (2009). 保育白書2009年版 京都：ひとなる書房.

## 謝辞

本研究の調査にご協力くださいました多くのお母様方ならびに、児童館、保育所、子育てセンター、区役所、保健所の施設長および職員のみなさまに感謝いたします。